

## 不登校児童生徒への対応事例6（中学校第1学年女子）

### ～教育委員会、学校、家庭の役割分担を明確にした対応～

#### 問題の把握

当該生徒は、小学校の時から自己表現が苦手で、自分の思いを溜め込む傾向があった。当該生徒の母親によると、小学校第3学年の時の学級担任による強い指導の影響で、「完璧主義になった」という。また、人とかかわることが苦手で、同級生との交流や学校行事への参加に消極的であり、小学校第5学年から不登校となった。なお、当該生徒は、小学校第5学年時に「広汎性発達障害」と診断された。

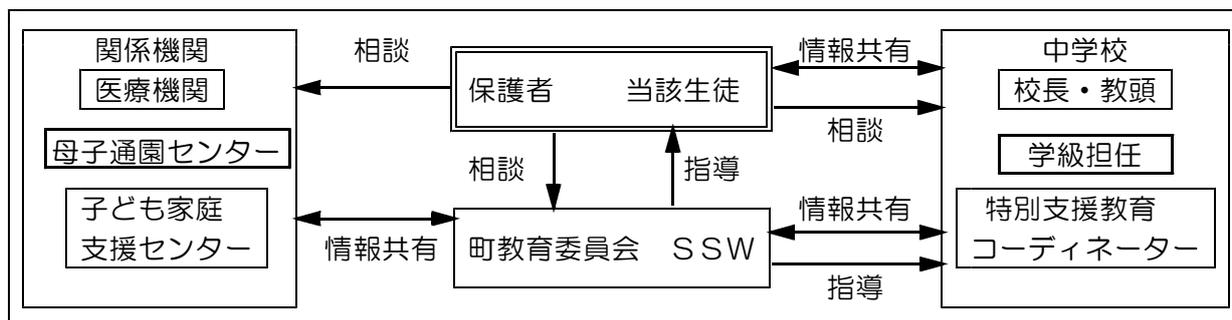
#### 対応状況

##### 【第6学年時】

- 母親の要望により、当該生徒は、週に1回、町教育委員会の教育相談施設に通った。
- 教育委員会のSSWが、本人や保護者のニーズに沿いながら、母子通園センターや医療、学校と連携して、教育相談施設における活動プログラムを作成した。
- 教育委員会のSSWが、当該生徒に褒めることを中心としてかかわったことにより、当該生徒は、徐々に人とコミュニケーションができるようになった。

##### 【中学校第1学年時】

- 当該生徒は、中学入学時に登校への意欲をもちはじめ、まず、5分間の玄関登校ができるようになり、その後、給食の時間まで登校できるようになった。
- 教育委員会のSSWが、授業や下校時に同行するとともに、教育相談施設での活動状況や当該生徒、保護者の状況について、学校と情報を共有した。
- 学校は、学習の遅れに対する補充的な指導や保護者と連携した当該生徒の生活態度の改善に向けた指導を行った。
- 教育委員会、学校、家庭が、当該生徒の精神状態や体力の状況について共通理解を図り、当該生徒に合った活動プログラムを作成したことにより、学校で過ごす時間が増加した。



#### 不登校の問題を速やかに解消するためのポイント

- ・ 複数の機関が情報を共有しながら、児童生徒の状況に応じた対応を行うこと。
- ・ 町教育委員会が主体となり、児童生徒の活動プログラムの作成をとおして、学校、保護者、関係機関との行動連携を促進すること。